【姫路市立家島小学校】の取組

１　気づき、対話し、行動しようとする児童の育成

～海から始まる学びの一歩を、児童の主体性につなげて～

２　テーマ設定の理由

家島の児童の成長を支えているのは、豊かな自然と、温かな地域社会である。地縁だけでなく、島外者とのつながりも大切にする地域性は、都市部にありがちな他者に対しての無関心さとは真逆の空気感を醸し、家島らしさの礎となっている。家島神社の例祭「家島天神祭」では、海の安全と五穀豊穣を祈り、壇尻船の上で獅子舞を奉納するが、児童も子役や笛の吹き手として獅子舞を支えている。伝統行事の継承に関わることで、ふるさとへの思いを強め、世代や年齢を超えて関わり合う風土が形成されている。しかし、中学校、高等学校等への進学時に家島を離れる生徒や家庭も少なくない。児童数の減少により、多様な考えに触れ、学びを深める機会の確保は、年々難しくなってきている。限られた学習の場で、学びの質を高めるために必要なのは、学びを自分事としてとらえて向き合う姿勢だ。児童が本来持つ、知りたい、分かりたい、できるようになりたいという思いを日々の学びにつなげるためには、児童が「自分事」から始められる学びの場が必要だ。

そこで本校では、令和２年度より、家島の海に関する体験的、探究的な活動に取り組む「家島うみの時間」を設定した。自分事の学びから生まれた気づきは、対話につながる。そして、生活を支え、文化の礎となってきた家島の海を見つめることは、自然や社会とのつながりを意識するきっかけとなる。上記のテーマは、家島の海を学びの出発点にし、社会と積極的に関わり、自ら行動しようとする児童の育成を目指し設定した。ふるさと家島に対する愛着を深め、誇りに思い、未来に関心を持ち続け、行動できる児童の育成を目指す取り組みについて、「家島うみの時間」を中心に紹介する。

３　研究経過

児童は、毎日様々な情報に接しているが、その多くは、自分とは無関係なものとして意識の外に流れていく。しかし、その中には自身との関りを持つ情報も含まれていたはずだ。情報に対する能動的な関わりを増やすにためには、自身を構成する様々な要素を把握し、自分の“輪郭”を認知する必要がある。そうすれば、その“輪郭”にふれる情報を、自分事の情報として取り入れることができるはずだ。では、家島小学校の児童に共通した“輪郭”の構成要素は何か。それは家島に生を受けたことであり、海とのつながりの中で生きてきたことであろう。「家島の海」を知るということは、自身の“輪郭”の一部を確かめることにつながる。そして、ふるさと家島に対する愛着を深め、誇りに思い、未来に関心を持ち続け、行動できる児童を育てていくことにつながる。そんな思いを抱き、家島小学校の「海洋教育プログラム」は令和２年度より３ヶ年の計画でスタートした。

３年間をそれぞれ、家島の海を「知る」、「探る」、「語る」１年と位置づけ、その年度毎に、「海にふれる体験活動」、「海から学ぶ総合的な学習」、「海でつながる交流活動」に取り組むこととした。

（I）　I 年次（令和２年度）の取組　～家島のうみを「知る」～

①体験活動の充実
（ア）海を感じる活動

海洋アクテビティ体験

目的　・海洋アクティビティ体験を通して、ふるさとの海の魅力にふれる
　　・家島の自然への関心を高め、ふるさとに対する愛着を育てる
参加　全校児童
概要　カヌー体験、SUP 体験、磯の生き物観察、浜辺清掃
協力　B&G 家島海洋センター

清水の浜うみの安全指導&海水泳体験

目的　・水辺の危険について知り、命を守る行動の大切さを学ぶ
　　・家島の豊かな海にふれ、ふるさとの自然を大切にしようとする意欲を高める
参加　全校児童
概要　海の安全指導、着衣水泳、海水泳、海中観察、浜辺清掃
協力　B&G 家島海洋センター

（イ）海の恵みを知る活動

魚つかみ体験&調理体験

目的　・魚つかみ体験を通して、豊かな海のめぐみにふれ、魚食への関心を高める
　　・家島の自然への関心を高め、ふるさとに対する愛着を育てる
参加　全校児童
概要　魚つかみ、お魚検定、魚調理&試食体験（塩焼き）
協力　家島漁業協同組合

漁業体感学習

目的　漁業の見学、漁獲物の解説、漁場環境学習を通じ、漁業への理解関心を深め、魚食普及を図るとともに、漁村地域とのふれあい、海の恵みを感じることを通して、命の営みやつながり、命の大切さを学ぶ。
参加　全校児童
概要　底引き網漁見学、魚仕分け体験、中間育成施設見学
　　稚魚放流体験、製氷施設見学、市場見学
協力　姫路市水産漁港課、坊勢漁業協同組合

自分でさばいた魚を食べよう事業

目的　地元でとれた新鮮な魚をさばき、調理することで、食育と魚の普及及び、地産地消を推進する。
参加　全校児童
概要　魚さばきの実演見学、魚さばき体験、魚調理体験、試食
協力　兵庫県漁業協同組合連合会

②縦割り総合への移行

（ア）課題の設定

本校では、集会活動や清掃活動の際に、全校児童が３つの縦割りグループに分かれて活動している。総合的な学習の時間にも、その縦割りグループを活用した。新型コロナウイルスの感染拡大により様々な教育活動が制限される中ではあったが、感染症対策を徹底し、3～6年生が縦割りグループで探究テーマについて話し合う場を設けた。各グループの人数は、4学年合わせて13名である。まず6年生が中心となって「家島の海」をキーワードに、ウェビング法を用いながらイメージをつなぎ、広げていった。そして、その中から自分たちが探究したい内容を絞り、最終的には6年生が各グループの方向性と、グループ名を決定した。

総合的な学習の時間　探究テーマ一覧（令和２年度）

	学年の視点	１班（環境）美しい海　家島	２班（安全・安心）プロジェクトTAA	３班（食）家島グルメ調査隊
３年	地域 環境体験	家島にすんでいる海の生き物を調査しよう。	家島の危険な魚を調査しよう。	家島のおいしい魚を調査しよう
４年	福祉	家島の海はみんなが幸せになる豊かな海か？	安心して遊べる清水の浜について調べよう	家島で愛されている魚の調理法について調べよう
５年	産業	海の美しさとプランクトンについて調べよう	家島の採石業を支えるガット船の安全について調べよう	家島のおいしい海苔をつくる養殖業について調べよう
６年	歴史 国際	海の美しさと地域の関係を調べよう	定期船の安全な運航について調べよう	日本と世界の魚食文化の違いを調べよう

また、探究テーマの設定に際しては、縦割りグループで取り組む縦のテーマとは別に、発達段階や学習状況に関連させた学年ごとの視点を設定した。これは、前年度までのカリキュラムの内容を反映させたもので、縦のテーマと学年ごとの視点を交差させ、各グループ（縦割りグループ内に学年別の４グループを設定）で探究をスタートさせた。

（イ）情報の収集

情報の収集は、学年ごとのグループで行った。コロナウイルスに対する感染対策が優先され、様々な制約が課される中であったが、GIGAスクール構想に基づくICT環境整備の一環とし、１人１台端末の利用環境が整備され、Chromebookを活用した情報の収集も可能になった。web検索だけでなく、Googleのアプリケーションを利用したアンケートやリモートでのインタビューなども可能になり、非対面であっても様々な方法で情報を収集することができた。

また、ICTの活用だけでなく、採集、飼育、観察や実験のような、具体に基づいた活動にも取り組んだ。これは「家島の海」というテーマの身近さがもたらしたメリットだと考えている。感染状況に改善が見られ、対面での活動に対する制限が緩和されてからは、インタビューに取り組むグループも目立ち始めた。児童、職員、保護者だけでなく、地域の方や公民館、役所の方にも積極的にインタビューし、多くの気づきを得ることができた。

総合的な学習に初めて取り組む３年生は、様々な体験活動を通して家島の海にふれ、親しむことから始めた。学校の前の護岸での魚釣りも、そんな体験活動の一つだ。海に囲まれた環境ではあるが、魚釣りをしたことがない児童が多く、釣れるたびに歓声が上がった。教室前の水槽では、

釣った魚だけでなく、タコやヒトデ、タツノオトシゴ、ウニ、イソギンチャク、海藻等を飼育し、観察した。それらの生き物は、漁師さんからいただいたり、家島漁協の許可を得て教員が採取したりしたものだ。児童にとってはおなじみの生き物もたくさんいたが、その生態を間近で見るのは初めてで、休み時間には食い入るように水槽をのぞき込む児童の姿がみられた。児童が書いた紹介カードには、採取した場所、形態や行動の特徴などに加えて、採取や飼育に関するエピソードやニックネームが記されており、家島の海の生き物が、児童にとって特別な存在になっていることを感じ取ることができた。また、水替えや水槽の掃除にも、3 年生の児童全員が協力して取り組んでいた。何気なく眺めていた海が、様々な気づきを生み出す学びの場へと変化していくことで、初めて取り組む総合的な学習の探究活動にスムーズにシフトしていくことができた。

（ウ）整理・分析

各種資料や観察、実験、アンケートやインタビューで得られた情報は、当初の予想や仮説と比較しながら整理、分析を行った。従来は web 資料の内容を無条件に受け入れ、情報の背景や真偽を検証しない児童も多かった。身近な海をテーマにすることで、web で入手した情報を、「本当にそうだろうか」や、「実際に確かめてみたい」と考える児童が増えてきた。予想や仮説に近い結果を得られた児童は、自分たちの考えに対する自信を深めることができた。また、予想外の結果が出た場合は、その理由について再度話し合う必要に迫られた。アンケートは Forms（Google アプリケーション）を利用して実施、集計し、結果について検証した。実施、集計に要する時間を大幅に短縮することができ、結果の分析に利用する時間を十分に確保することができた。

（エ）まとめ・表現

まとめ、表現する過程では、３～6 年生が一堂に会し、探究の成果を相互に評価し合う場を設定する予定であったが、コロナ禍の影響で、交流方法が限定された。10 月の中間交流会は、縦割り班内での交流にとどめ、探究活動の進捗と、今後の展望について交流を行った。年度末の学習発表会では全グループの成果を交流するため、個別の端末でのリモート交流会とした。そのため、発表資料は、プレゼンテーションソフト（Google スライド）を活用して作成した。データを共有することで、1 つの資料をオンラインで同時編集することができ、感染症対策を徹底しながらの協働が可能となった。授業者もデータを共有し、編集の進捗を随時確認しながら複数のグループに対して助言することができた。発表は Google Meet を利用し、リモートで行った。発表者、視聴者ともに各自の端末を利用し、質疑、応答もリモートで実施した。

(2)　２年次（令和３年度）の取組　～家島のうみを探る～

「家島うみの時間」の探究活動は、学びの意欲を高める上で大きな役割を果たしたと言える。児童、教員共に、海に関わる情報を意識するようになり、共通の話題について語り合う場面が増えた。また、探究活動では、地域の方や保護者、関係機関へのインタビューや海洋生物の観察、実験がしやすく、児童の意欲が学習の成果に反映されやすいという利点があった。さらに、1 人 1 台の Chromebook を、インターネット検索だけでなくアンケートの集計や発表スライドの共同編集に活用することで、気づきや学びをスムーズに共有することができた。各教科で習得したことを活用する機会も多く、「家島うみの時間」の探究活動に効果的につなげることができたのは、大きな成果だ。

その一方で、学ぶ意欲の高揚、学年を超えた交流、人的資源の活用の 3 点については課題が残った。縦割りグループごとの共通テーマを設けることは、目的の明確化、共有化に一定の役割を果たした。しかし、個々の児童の興味・関心を生かすという点においては、妥協を求められ、意欲の高揚を阻害する一因となった。児童の素朴な疑問を大切にし、探究する喜び、分かる喜びにつなげていくためには、個々の興味・関心を最大限に尊重することができるより細かなグループ設定が必要

である。また、縦割りグループでの共通テーマを設けながら、探究活動の大半は学級の枠組内で行われ、学年を超えた交流は限定的であった。同学年のグループ内で対話する機会は十分に確保することができたと考えているが、学年の枠を超え、それぞれの気づきを対話につなげるまでには至らなかった。また、専科等教職員が関わる場面も少なく、小規模校の強みである児童相互や教職員のつながりの強さを十分に生かすことができなかった。以上の点を踏まえ、探究学習のテーマを３つから大幅に増やすこと、学年を超えた交流を促進すること、教職員の個性やつながりを生かした支援体制づくりを進めることを令和３年度に向けた課題とした。

令和 2 年度の反省を受け、令和 3 年度はグループ構成等に対して以下のような変更を加えた。最大の変更点は、学年を解体し、4 学年混成で探究活動に取り組む完全な縦割り総合に移行したことである。テーマ設定とグループ構成について以下の通りとした。

・グループ数・・・前年度末に行った児童アンケートをもとに、テーマ別に７グループを設定
・希望・構成・・・児童の希望に基づき、所属グループを決定（3 学年混成）
　※　3 年生は９月まで、海洋生物の採取、飼育等の体験的な活動を中心に活動し、10 月の中間交流会後に所属グループを選択し、グループに合流する
　※　中間交流会は、3 年生児童を対象としたグループの活動紹介として実施
・担当職員　・・・校務分掌や特技等を勘案し、担当を決定
・時間割調整・・・総合的な学習の時間をそろえ、4 学年がともに活動できるよう調整

①課題の設定

・オリエンテーション
　4～6 年生が集い、「家島うみの時間」（総合的な学習の時間）について、全体のテーマと 1 年間の流れの確認を行った。
・所属グループの決定
　前年度末のアンケートをもとに設定した７つの探究テーマ（仮）を提示し、希望をもとに所属グループを決定した。3 年生は 10 月から加入するため、４～6 年生（3 学年混成）の３～5 名のグループに分かれた。
・探究テーマの決定
　6 年生が中心になり、ウェビング法等を活用しながら、探究の対象を絞り込み、各自の疑問をもとにグループの探究テーマを決定した。また、多くの児童が既に知己の仲ではあったが、改めて自己紹介し合い、ともに学ぶ仲間として、思いを一つにする機会とした。

テーマ別グループ名簿（令和３年度）※学年のみ表記

	家島うみの時間　グループ名簿						
活動場所	海の教室			6年1組		5年1組	
ｸﾞﾙｰﾌﾟ名	海を見る！	家島の海博士	われら家島保安庁	海と山の探検隊	家島marine innvotars	家島の地産地消追究隊	旨い家島調理隊
探究の内容	飼育 図工作品制作	生態調査 観察・記録	船や港の安全 防災・環境	山との比較 類似／相違	家島産魚介類の魅力発信 ブランド化	地産地消促進 メニュー開発	塩、干物、醤の制作等
所属児童	6年生	6年生	6年生	6年生	6年生	6年生	6年生
	6年生	5年生	6年生	5年生	6年生	6年生	5年生
		4年生	5年生	4年生	5年生	5年生	4年生
		4年生	4年生	4年生	4年生	5年生	3年生
		3年生	3年生	3年生	3年生	4年生	
		3年生				3年生	
担当職員	特別支援学級担任	家庭科等専科担当 3年生担任	4年生担任	理科等専科担当	6年生担任	栄養教諭	5年生担任

②情報の収集

テーマを細分化し、児童の興味・関心に基づいたグループ分けを目指したことで、見通しを持って探究計画を立てる児童が多くなり、情報収集の方法にも多様性が見られるようになった。また、学級担任に加えて専科担当教員や栄養教諭もグループの支援を担当するよう変更したことで、教員１人あたりが担当する児童数が少なくなり、児童に寄り添ったより細やかな支援が可能となった。近くの山で植物や昆虫の観察をしたり、海で海藻や微生物を採取したり、近在の島で行われている塩づくりの見学に行ったりと、グループごとに様々な調査方法を選択し、情報の収集に努めた。また、学習園で米や大豆を栽培するなど、長期的なプログラムに取り組むグループも出てきた。校外に出て情報収集にあたる場合は、校外調査活動計画書を提出し、安全性を確保した計画的な活動になるよう留意した。

③整理・分析

総合的な学習の時間では、各教科で習得してきた知識や技能、見方・考え方等を活用しながら情報の収集や整理・分析を進める。異学年の児童が協働して取り組むため、活用できる既習事項には違いがある。各グループの担当教員は、児童の習得状況に合わせて支援をしていくが、場合によっては高学年の児童の整理や分析の方法等を紹介したり、解説したりするように心がけた。例えば、理科的な実験に取り組む際には、比較対象以外の条件をそろえたり、情報の信頼性を高めるために同じ実験を複数回実施し、結果を平均値で比較したりする必要がある。その場合、高学年の児童が未習の下学年児童に対して、実験の意図や操作の必要性を説明するが、必要に応じて教員が助言するようにした。自分の考えを説明することは、学びを深める絶好の好機である。それが「下学年児童が分かるように」であれば、なおさらだろう。また、未習の内容に触れる経験も、習得段階で感じる抵抗を軽減するはずである。さらに、相手の立場や状況を考えながら考えを伝える経験は、対話を進める上で大きな意味を持つ。通常の授業環境では経験できない様々な違いを、個々の児童が学びを深める機会につなげようと試行錯誤している。

④まとめ・表現

令和３年度の中間交流会は、３年生への活動紹介を主目的とし、10 月に実施した。３年生はその後、自分が参加するグループを決め、探究活動に合流した。感染症対策を徹底した上で多目的室に集まり、全グループが活動の進捗と今後の展望について発表した。Google スライド（プレゼンテーションアプリ）を用いて発表するグループが多数を占めたが、ポスターや紙芝居、寸劇等の方法で伝えるグループもあり、３ 年生に分かりやすく伝えようとする意欲を強く感じる発表となった。質疑応答の場面では、３ 年生からの質問を優先的に扱ったが、他学年からも様々な質問や感想が寄せられ、視野を広げて活動に取り組むきっかけとすることができた。

２ 月の最終発表会は、感染症対策のために対面での発表ができず、録画視聴の形式をとった。対面での質疑応答ができないため、Google フォームを活用し発表内容に対する質問や感想を集約し、掲示板に解答を張り出す形で意見の交流を図った。また、Google サイトを活用して保護者にも発表の様子を公開し、意見や感想を集約した。保護者からは、「家島うみの時間」に対する好意的な意見が寄せられ、活動を力強く後押しを得ることができた。

(3)　３年次（令和４年度）の取組　～家島のうみを語る～

令和４年度は、「安全」「生物」「産業」「食」の４グループに集約し、探究活動に取り組んだ。感染症対策のために実施できなかった対面での発表ができるようになり、中間交流会では活発に意見を交換する姿が見られた。家島の海で得られた気づきを対話へとつなげ、学びの対象を広げることができた。また、自分たちの学びをより多くの人に伝えたいという思いを持つこともできた。２ 月の最終発表会は、保護者や地域の方を前に、家島の未来について語る場と位置づけている。

総合的な学習の時間　探究テーマ一覧（令和４年度）

グループ名	探究テーマ	活動
われら海底保安庁	船は地球を救う ～船の安心、保証します～	船の安全を妨げる課題を調査し、船の明るい未来を発信する
家島海洋研究所	家島、そして生き物たちのつながりをさぐる	生物の採取や観察 生物の飼育
家島っ子産業振興課	家島の産業の凄さを伝え、これからの家島の産業を語ろう	水産業、砕石業を中心に、家島の産業と社会とのつながりを調査
家島！未来の地産地消守り隊	昔、今、未来の家島の地産地消 ～未来永劫残る地産地消の献立～	未来に残したい家島の地産地消メニューの開発

「家島うみの時間」の体験活動や探究活動は、保護者や地域の方だけでなく、様々な機関、団体からの支援や連携により支えられている。「家島うみの時間」の開始時から相談や依頼を重ねてきたが、力強い後押しは途絶えることがない。児童が生き生きと活動する姿に目を細め、見守ってくださる地域の温かさに触れるにつれ、家島の未来に対してできることがもっとあるのではないかと強く感じる。また、校種や地域を超えた交流を模索してきた。紡いできたつながりを次年度以降の活動の礎としたい。

関係機関	連携内容
家島漁業協同組合	魚つかみ体験 ヒラメの稚魚育成協力
B&G 家島海洋センター	海の安全指導 海洋アクティビティ体験 総合的な学習インタビュー
姫路市水産漁港課	漁業体感学習
坊勢漁業協同組合	
兵庫県漁業協同組合連合会	魚さばき体験
姫路市総務局家島事務所	総合的な学習の時間 学習支援
家島公民館	

①兵庫県立大学からの支援

尾崎　公子　教授　　環境人間学部（教育政策研究室）

・助言　「家島うみの時間」総合的な学習の時間　中間交流会・学習発表会（令和２年度～）

・講話　「へき地・小規模校の特徴を生かした教育実践について」　※リモート実施

「地域への愛着形成と社会参画に関する調査を通して」

井上　靖子　教授　　環境人間学部（臨床心理学研究室）

・ミソドラマの実施

・自己表現が苦手な児童のサポートプログラムの実施

③校種や地域を超えたつながり

幼小中高交流・・・家島地区幼小中高合同防災訓練

幼小中高交通安全教室

リモート交流

・姫路市立坊勢小学校　・・・12 歳の夢サミット（６年生）

・姫路市立伊勢小学校・・・外国語活動合同授業（６年生）

・姫路市立山田小学校・・・林間学校合同開催プロジェクト（４年生）

・山口県美祢市立秋吉小学校　・・・総合的な学習発表交流（3～６年）

・山口県美祢市立麦川小学校　・・・総合的な学習発表交流（3～６年）

４　研究の成果と課題

（1）　成果

令和２年度からの取組をふり返ると、「家島うみの時間」は児童の学びの意欲を高める上で大きな役割を果たしたと言える。全校で統一したテーマに取り組むことで、児童、職員ともに、海に関わる情報を意識するようになり、共通の話題について語り合う場面が増えた。また、調べ学習では、地域の方や関係機関へのインタビュー、観察、実験がしやすく、児童の意欲が学習の成果に反映されやすいという利点があった。さらに、１人１台の Chromebook を、インターネット検索だけでなくアンケートの集計や発表スライドの共同編集に活用することで、気づきや学びをスムーズに共有することが出来た。各教科で習得したことを活用し、探究活動に効果的につなげることができたのは、大きな成果だと感じている。また、家島のことを知り、ふるさと家島に対する意識が高まることで、今まで気づかなかった自分との関りに気付く機会が増えたのは確かだろう。また、総合的な学習の時間を楽しみに待ち、自分の学びを嬉々として語る児童の姿も印象に残った。「家島うみの時間」の探究活動は、学びを身近にし、学ぶ楽しさを実感させる機会となったと確信している。

また、縦割りで探究活動を行うことは、多様な意見に触れる好機となった。学年が違うことによる知識や技能、発達段階の差は、一見不都合なことのようにも思えるが、発達段階が異なる相手との対話することは、相手の立場や状況を意識して話そうとする意識につながった。実際、高学年の児童が下の学年にも分かるように丁寧に説明したり、下の学年の児童が上の学年の児童にアドバイスを求めて問題を解決しようとしたりする姿も見られた。このような経験を繰り返すことで対話が深まり、より主体的に問題を解決しようとする姿勢につながると考えている。

（2）　課題

情報と学びの自分事化は、まだ「身近さ」に依存した段階だと考えている。「家島うみの時間」をきっかけにし、これからも自分事を広げる取組を続けなければならない。児童の素朴な疑問を大切にし、探究する喜び、分かる喜びにつなげていくことが大切になる。

また、児童が学ぶ楽しさを実感するためには、教師自身が学ぶ楽しさを実感する必要がある。これまでの取組の中で、教師自身が問題解決の経験が少なく、主体的に探究活動を行うことが難しいという実態も見えてきた。児童の主体的な学びを支援するためには、教師自身が探究の楽しさや喜びを実感する必要がある。職員総合と銘打った研修では、「家島のうみ」をテーマに、児童と同じ視点で各教員が１年間探究活動に取り組み、成果を交流してきた。児童と同じように、教師自身も気づきを共有し、対話を重ねていきたいと考えている。

また、探究活動を進めていく中で、既習の知識・技能や教科特有の見方・考え方を活用することが重要であるとの認識を新たにした。本校では、全教員が全児童に関わり、個に応じた支援を充実させることを目指している。そのためには児童が各学年でどのような知識・技能を習得し、どのような見方・考え方を身につけてきているのかを教師自身が学び、把握しておく必要がある。探究活動における支援のあり方について、今後も検証を続けていきたい。